TATSUO MIYAJIMA
BEYOND THE DEATH

熊本市現代美術館発行
AKL
ART KISS LETTER
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto
vol.22

2005.7.23-10.23　開館記念日10月12日(水)は入場無料となります。

<Mega Death>と宮島達男さ

宮島達男　Beyond the Death展［死の3部作］
平成17年7月23日(土)－10月23日(日)

1988年のベニス・ビエンナーレ、アペルト展参加以降、世界を舞台に活躍する宮島達男。「それは変化し続ける　それは永遠に続く　それはあらゆるものと関係を結ぶ」というコンセプトより生み出された、「死の3部作」《Death of Time》(1990-1992)／《Mega Death》(1999)／《Deathclock》(2003-　)を世界で初めて一挙に展示いたします。今日、そして明日をよりよく生きるため、「生」と「死」を見つめ直すことをうながす宮島達男の作品世界を会場内でぜひご体験下さい。

開館時間：午前10時～午後8時（展覧会入場は7時30分まで）
＊8月13、14日は、22時まで開館（展覧会入場は閉館の30分前まで）
休館日：火曜日
観覧料：一般1000(800)円、高・大学生500(400)円、小・中学生300(200)円
熊本市内小・中学生　無料（名札など証明できるものをお持ち下さい。）
(　)内は前売及び20名以上の団体料金
なお、10月12日(水)は開館記念日のため観覧料は無料となります。

≪Deathclock for participation in CAMK≫入力風景

宮島達男さん、密着レポート！

7月17日、作品設営の準備のため、オープニングの6日前に宮島達男さんが来熊されました。

宮島達男さんは到着するなり「さすがに暑いねー」と汗をふきふき、明るく登場。美術館にまっすぐに向かい、すぐさま、一足さきに現地入りし作業を進めていたアシスタントさんと打ち合わせを行い、作品設営の作業が開始されました。

宮島さん、そして様々なスタッフさん達の手によって、徐々に3作品の準備が整っていく様子は、宮島さんが語る「作品ていうのは、娘を嫁に出すようなものなんです」という言葉の通りに、ひとつひとつが、大事に手厚く、思いをこめて作られた作品であるということをしみじみ感じさせるものでした。

いよいよオープニングを迎えたとき、宮島さんは当館ボランティアCAMKEESより贈呈された折鶴のレイを首に飾って登場。「美しい女性の方が似合うかもしれませんが、ボランティアの皆さんの真心への感謝の思いを表したい」との開会式のあいさつでした。

展覧会初日、浅田彰さんとの記念トークのなか、「《Mega Death》で、LEDがすべて消えて真っ暗になるというのは、ちょっと手法としてはベタですよね。でも、20世紀の大量死を表現するためには、ベタでもあえて行うべきだと感じたんです」との言葉が印象的でした。＊記念トークの全内容は宮島達男展カタログ第二部に掲載いたします。

この展覧会を待望して遠路はるばるご来館されたファンのみなさんひとりひとりとの記念撮影・サインなども快く応じられ、そういう交流の瞬間にも、宮島さんご本人の、思いやりをもってひとりに接する、あたたかい人格があらわれていました。(H.T)

宮島達男さんとアン・ハミルトンさん
(2006年2月から当館での展覧会の作家)

草間フィルム上映会

6月25日・26日の18時30分から当館ホームギャラリーで、草間彌生のフィルム作品『草間の自己消滅』(1967年制作、23分、ノーカット版)、『ラブ・イン・フェスティバル』(1969年制作、8分)の上映会を行いました【26日は『草間の自己消滅』(1967年制作、23分、ノーカット版)、『フラワー・オージー』(1968年制作、7分)を上映】。

上映した『草間の自己消滅』は第4回ベルギー国際短編映画際に入賞、第2回アン・アーバー映画祭にて銀賞を受賞しており、なかなか観ることのできない貴重なフィルムでした。今回の草間彌生展とあわせ、熊本での初公開ということもあり、会場は上映時間の前から、たくさんの立ち見の鑑賞者がでるなど、夜のホームギャラリーは熱気に包まれました。そこに集まった熱狂的な観客の皆さんの世代層の幅の広さに、改めて草間彌生のすごさを感じました。(R.Y)

上映会風景

熊本市現代美術館アートブック第1弾
福島次郎『花ものがたり』出版記念パーティー

さる5月24日、『花ものがたり』出版記念パーティーを開催いたしました。パーティーは、熊本バレエ研究所の少女たちによる愛らしいバレエの披露より始まり、安永蕗子さん(歌人)、緒方惇さん(詩人)らによる、『花ものがたり』への祝辞をいただきました。

福島次郎さんは、闘病生活を経験して得たもの、それは、「バレエの子供たち、庭の花、生きているもの全てが輝かしくみえることです」と、ご出席いただいた約190名の方々を前に、素晴しい笑顔で語ってくださいました。(H.T)

福島次郎著『花ものがたり』(定価2000円)は熊本市現代美術館にて販売しております。通信販売もご利用できます。

福島次郎さん

「父の日」スペシャル
ーお父さんのカレー皿！

お食事会風景

2005年6月19日(日)「父の日」に館内カフェ・レガルに於いて、お父さん力作のお皿でスペシャルカレーを頂くカレーディナーを行いました。

「父の日」に向け、館内キッズファクトリーにてお父さんが家族分のカレー皿の形つくり・色付けをして、美術館の窯で焼き上げたお皿を使って、家族みんなでカレーを頂くところまでがセットになったイベントでした。

形はシンプルでしたが、釉薬によってそれぞれのお父さんの性格まで表した(？！)ような独特な色が出て、とても素敵なお皿に仕上がりました。

陶芸は初めてというお父さんもいて少々不安そうでしたが、予想以上の出来に満足のようす。奥さまやお子さんにもとっても好評でした。お子さんだけでなくお孫さんまでがディナーに参加したご家族もあり、おじいちゃんのお皿でおいしそうにカレーをほおばる光景がほほえましいディナーとなりました。

お父さんへの感謝の気持ちがカレーを食べた時の笑顔となって、お父さんに届いたのではないでしょうか？(A.T)

museum information

東部児童館・熊本市現代美術館共催による、小学生を対象としたワークショップが行なわれました。

第1回　劇団きららによる演劇ワークショップ「みえないなわとびをとぼう」
2005年6月18日(土)午後2時～

遊びながら演劇の楽しさに触れる、劇団きららのワークショップが、熊本市現代美術館キッズファクトリーで開かれました。このワークショップでは、「演じてみる」ことを通して、自己表現することを知ってもらいます。

劇団きららのみなさんが、手にみえないなわとびを持って、大きく回します。そのなわとびをみんな一人ずつ跳びます。まるで、本当に大なわとびをしているかのようです。

他にも、探検隊ごっこや、大声で仲間を呼び合う仲間探しゲームなど、さまざまなプログラムで遊びました。体全体を使って元気いっぱいに楽しんだ子ども達、ワークショップが終わるころには、みんな顔がきらきらと輝いていました。

みえないなわとびをとぼう

第2回　熊本ジェンベクラブ代表村本大さんによる「ジェンベワークショップ」
2005年7月2日(土)午後2時～

西アフリカの楽器、ジェンベを叩いて、リズム音楽の楽しさに触れるワークショップです。熊本ジェンベクラブ代表の村本大さんが、まず、ジェンベが生まれた国や文化背景についてお話をしてくれました。そして、いよいよジェンベを叩きます。

真ん中を叩いたときの音、縁っこを叩いたときの音、手を開いて叩いたときの音、手を閉じて叩いたときの音―いろいろな音の違いを確かめます。そして、それぞれの音を組み合わせ、熊本大学ジェンベクラブの方々の伴奏にのって、簡単なリズムから打ち始めました。リズムはだんだんと難しくなっていきます。

みんな、手を真っ赤にしながら、一生懸命叩きました。アフリカの雰囲気に触れ、打楽器の豊かな世界に触れることのできたワークショップでした。

ジェンベワークショップ

次回予告！　木工作ワークショップ

守山栄賢さん(木工芸家)と小枝を使った木工作を楽しみます。
日時：9月3日(土)午後2時～4時
場所：熊本市現代美術館キッズファクトリー
講師：守山栄賢(これかた)
対象：小学生15人　※参加費無料

＊ 開催場所は熊本市現代美術館、受付は東部児童館です。
＊ 申し込み方法：東部児童館へ往復はがきに住所・名前・学校名・学年電話番号を書いて申し込んでください。(申込多数の場合抽選)

〒862-0912
熊本市錦ヶ丘1-1東部児童館(東部公民館内)
TEL:096-367-1134

SUITOTTO Kumamoto
【スイトット・クマモト】

今年度のスイトット・クマモトは、当館の展示室
GIII（ジースリー）での展覧会をご紹介致します。

GIII.vol.28（2005.6.6－7.3）

浜田知明新作彫刻展 2000-2004

展示風景

ホームギャラリーに常設展示された《セルバンの門》

本展では浜田知明さんの近作彫刻15点とあわせ、熊本市現代美術館ホームギャラリーに2005年3月に設置された《セルバンの門》をご紹介いたしました。

パリ時代に住んでいたというホテル《Hotel du Nord-Sud》に登場する犬やホテルの面白い構造をはじめ、各作品にまつわる様々なエピソードを話して下さいました。開館中、頻繁に会場まで足を運んで下さった浜田さんに、居合わせた来場者たちは丁寧な作品解説を受け、喜んで帰られたようです。作品とともに浜田さんのお人柄にも触れられる展覧会となり、とても貴重な体験となりました。(N.I)

●浜田知明略歴

大正6年(1917)熊本上益城郡御船町に生まれる。
昭和14年(1939)東京美術学校油画科卒業。卒業と同時に入隊。
昭和25年(1950)『砂年兵百景』シリーズの制作を開始。
昭和39年(1964)渡欧、パリに滞在。
昭和40年(1965)帰国。フィレンツェ美術アカデミー版画部名誉会員となる。
昭和54年(1979)「浜田知明銅版画展」(熊本県立美術館)、「浜田知明展」アルベルティーナ国立美術館(オーストリア)、グラーツ州立近代美術館(オーストリア)
昭和60年(1985)熊本県近代文化功労者として顕彰される。
平成元年(1989)フランス革命200周年に際し、フランス政府より芸術文化勲章(シュヴァリエ章)受賞。
平成5年(1993)「浜田知明展」(大英博物館・日本館)
平成12年(2000)「浜田知明・彫刻による諷刺展」(神奈川県立近代美術館)
平成13年(2001)「浜田知明展－版画と彫刻による人間の探求－」(熊本県立美術館)
平成17年(2005)「浜田知明新作彫刻展」(熊本市現代美術館・ギャラリー」)

GIII.vol.29（2005.7.6－7.31）

熊本の写真家シリーズ第一弾
坂本徹・川畑雅弘・緒方弘之 3人展

展示風景

長く熊本日日新聞社の報道カメラマンとして活躍し、その社会と人間を見つめる的確な視覚を通して、退社後も精力的に撮影活動を続ける坂本徹氏。そして、それぞれが独自の美学によって熊本の自然を写し撮る川畑雅弘氏と緒方弘之氏。今回は3人の写真家の作品展を開催いたしました。坂本氏は実に独創性豊かな発想からのアングルで日常のひとコマを切り取り、川畑氏は環境汚染など叫ばれる中、今も変わらず在りつづける美しい有明海の姿をライフワークとして撮り続ける。また写真は記憶の箱という緒方氏は阿蘇の大自然、湧水の湖「江津湖」を見事に自分のものにしている。3人の作品はそれぞれの個性を競わせつつも調和し、訪れた方々をしばし別世界へと導いていました。(S.S)

●坂本徹略歴

1932年熊本市生まれ。1951年熊本日日新聞社入社後、報道写真記者として事件、事故はもちろん、季節もの(官写真)、連載もの、大型企画、文化関係などあらゆるジャンルの写真を撮り続けてきた。また現在は精極的に活動を展開するフリーランス写真家である。荒瀬ダム写真コンテスト特選(1954年)、メーデー写真コンテスト特選(1955年)、県文化協会常務理事、県文化振興会常任出題人(写真部門)、県芸術文化表彰審査委員。

●川畑雅弘略歴

1934年福岡県北九州市小倉生まれ。子供の頃より貝掘や魚釣りなどで有明海に親しむようになる。熊本日日新聞社写真部入社後、報道写真家として活躍する一方で有明海の撮影にも本格的に取り組む。個展「有明海」－記憶の中の風景－」などの活動を経て、1995年写真集『有明海』－記憶の中の光景－」を出版。その後も精力的に各地で個展を催し、有明海の現状を踏まえたなかでの美しい有明海の姿というものを切り取り伝えていった。現在はNHK熊本文化センター、湖東カレッジ教育芸術専門学校で講師を勤めるなど、写真普及に尽力している。二科会写真部公募展 特選(マミヤ賞)。二科会写真部会員。

●緒方弘之略歴

1945年長崎県生まれ。阿蘇風景を中心に撮影活動を始め、1978年に第26回二科展入選を果たす。(以後、通算10回入選する。)そして、第3回日本の自然100選写真コンテスト優秀賞、第35回ニッコールフォトコンテスト大賞及び長官賞、国際花と緑の博覧会フォトコンテストゴールド賞、第3回月桂冠日本の美フォトコンテスト大賞、2003年にはエプソンネイチャーフォトアワード竹内敏信賞など、数ある受賞歴を持つ。同年退職後は、ニッコールクラブ熊本支部幹事、プリランテ写真研究会代表世話人を務める。主な作品は1993年　写真集「樹・生きるものの形」共著(尾崎義明、河野芳弘、緒方弘之)、2004年　写真集「美しき阿蘇」、「南風の森・天草」などにおさめている。

●お知らせ

・井手宣通記念室　夏の展示替えしました
夏をテーマに描かれた作品に展示替えいたしました。海辺の賑わいや花火を描いた風景画を中心に紹介しております。夏の風情をお楽しみ下さい。(H.T)

・階段ギャラリー展示替えしました
6月16日に館内の5階へ続く階段ギャラリーを、東町中学校の生徒6名の『陶芸・絵画　作品展』に展示替えを行いました。主に当館でチャレンジしました陶芸のお茶碗を中心に、普段、学級や家庭で描いている絵などを展示しています。(R.Y)

執筆者一覧
＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山　Syozan Kaneshiro（書道家）
森山淡草　Tanso Moriyama（書道家）

本田代志子　Yoshiko Honda（熊本市現代美術館学芸員）
座座江美　Emi Zoza（熊本市現代美術館学芸員）
金澤鼓　Kodama Kanazawa（熊本市現代美術館学芸員）
冨澤治子　Haruko Tomisawa（熊本市現代美術館学芸員）
山室りさ　Risa Yamamuro（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
竹田茜　Akane Takeda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
伊豆菜々　Nana Izu（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
園田聡美　Satomi Sonoda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）

編　集　後　記

「宮島達男－Beyond　the　Death」展がいよいよ始まりました。「Death of Time」、「Mega Death」、そして「Death Clock」の、「死の3部作」を世界で初めて同時に展示するもので、死を乗り越えて、生の意味を考えようとする宮島さんの本質を象徴的に表わす展覧会です。ちょうど今年は戦後60年目に当たりますが、この展覧会を通して、ますますその複雑化する社会の中で、もう一度、他者の死、そして自らの死への想像力を取り戻していただけたらと思います。

編集長　南嶌宏

2005.6.1 - 2005.7.31

「はなはな展」
2005.6.8−6.20　ギャラリーキムラ
熊本市水道町3-5(上通KビルbF) TEL327-0166

厚地宣行(人吉市在住)・横山博之(熊本市在住)の「はな」を題材にした二人展。
厚地さんの抽象的な「はな」と、横山さんの写実的な「はな」。対照的な花々が織り成す空間が広がっていた。厚地さんの「遊花」という作品の「はな」は、軸がなく、「はな」は地面に横たわり、その上に空間が広がっていて、中間でもなく上でもない、下におかれた「はな」の上部に広がる空間が、見るものの想像力をかきたてていた。「「はな」もそれをとりまく空間も敢えて未完のままに終わらせている」と語る厚地さんは、描きながら余韻を残す意味に気がついたという。「軸があると「花」になってしまう。軸があっても見えないくらいに描いている。具体と抽象の中間を描きたい。あくまでも両義的という点をなくさないようにしている。」と語る厚地さんの新作「花星座シリーズ」も「花(地)」と「星(天)」という題材で、「両義的さを失くさない」姿勢を一貫して通している。
一方、横山さんの写実的な「はな」。「花」の持つ造形や色ももちろん好きで描いているけれども、自然の光を描きたいと語る横山さんの言葉のとおり、花びらにふりそそぐ光や、花びらの重なり具合によって作られる陰影、葉から透けて見える光をとらえ、そのときそのときの光を切り取っている。あでやかな「花」についつい目がいってしまいがちだが、その花の持つ凛としたたたずまいの中に昔日は見落としがちな柔らかな光が浮きたって見えて、はっとさせられた。
「会場全体もひとつの作品にしなければならないから個人展の場合と違って難しいこともあるが、今回は対照的な作品がうまく重なり合っておもしろい空間になったのではないか」と語るお二人の言葉どおり、今まで自分が「はな」から想像していたイメージとはまた違った視点で想像力がかきたてられ、厚地、横山両氏のこれからの作品がとても楽しみになった展覧会だった。(E.Z)

「第27回熊本県書道展」
2005.7.5−7.10　熊本県立美術館本館・分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本書道振興会(松本逢邦会長)が主催する350点規模の書道展である。公募部の入賞入選作品と、会友部、無監査部の約240点が美術館本館の第一、二、三室に、準会員、会員の92点は分館の第三室に展示された。
書道人による運営が特徴であるが、組織が一種の社中の連合体であるため、漢字、仮名、漢字仮名交じり、古代様式から現代様式まで、作品の表現様式に変化が見られるのが面白い。
本館の会友部と公募部には大作が並んで迫力を感じるが、分館の会員、準会員は流石に県内の実力者が揃っているので、作品の大きさは半切以内だが、高いレベルを見せていた。(T.M)

「第8回遊美塾」
2005.6.7−6.12　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

6月7日〜12日まで県立美術館分館で開催された第8回遊美塾の展示会。約60名の西本和民氏のもとで芸術に挑戦する人たちの熱い作品がずらりと並ぶ会場にパワーが溢り圧倒された。"遊美塾"は主に写真を中心とした講座を開いており、他には映像、マックなどの現在必要とされている技術なども学べるようになっている。
今回、その講座を受けている生徒さんの作品がそれぞれにレイアウトされて展示してあり、その参加者の年齢も幅広く、高校生から80歳を超える方も自由にのびのびと、そして個々にメッセージ性の高い作品を発表していた。(R.Y)

鈴木飛鳥さん<save me「so sweet?」>

「2005熊日デザイン賞作品展」
2005.6.14−6.19　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

第51回目を迎えた熊日デザイン賞作品展(グランプリ:西迫郁さん)。公募で1815点のなかから選ばれた入賞・入選作82点が展示されていた。課題ポスター部門、ポスター部門、ビジュアルアート部門、CD部門(中・高校生のみ)と部門ごとに展示、若きデザイナーたちの表現する「今」を垣間見ることができた。
自由なテーマでの募集ということでも、作品のコンテンツとしては、政治や環境問題を取り上げたものが目立った。そして、そのような複雑な主題のせいもあり、少々残念なことに、デザイナーの視点・個性が強く出たイメージというより、ありがちなイメージに従われてしまっているものもあった。
入選の鈴木飛鳥さんの<save me「so sweet?」>は、象牙とサイの角を砕けたビスケットで表現。動物型ビスケットが流布しているのを踏まえたのと、壊れたら(絶滅)もとに戻らないというメッセージをビスケットでわかりやすく、そして遠い国の出来事を身近な日々の素材を使用することで親近感を持たせる表現が特徴。ポスターとしてはやや地味だが、画面全体の色面構成は安定しており、端正な仕上がりの作品だった。(H.T)

作家の小山令子さん

「小山令子第77回帽子近作個展」
2005.6.15-6.20　ヴィラージュ・ギャラリー

「帽子はかぶられてはじめ完成する。軽くて頭にフィットする帽子、かぶっているのが分からないくらい着心地のよい帽子を作っています」と語る小山さん。今回の展覧会は夏から初秋にかけての小山さんの近作帽子展。素材もシルク、パルプ、リボン、天然素材のパナマと様々で、夏らしく涼しげな帽子たちに出会うことができた。これまで作ってこられた帽子に同じものはないという。色も小山さんの好きな色ばかり、どれも美しい色合いであった。ケーキ菓子のような帽子、かぶるだけで元気になる帽子、透き通った涼しげな帽子と着心地だけではなく、目でも楽しめる味わい深い帽子ばかりであった。
帽子を作るのが大好きという小山さん、取材にお伺いした日も淡いラベンダー色の優しい帽子をかぶられ、帽子にぴったりの柔らかい笑顔で迎えて下さった。小山さんは小さな頃からお母様の作られた帽子を愛用されていたそうである。そのことがきっかけで、小山さんご自身も帽子作りに興味を持たれ、東京の帽子学校へ1年間通われた。その後、銀座の帽子アトリエで10年間始弦を続けられたそうである。
熊本で2回、東京で2回と毎年展覧会を開催。今年で39年目、第77回の節目を迎えられた。現在、熊本市在住。(N.I)

作家の川上順さんと家族

「川上順ースペイン、アンダルシア〜大地、静けさの中で〜」展
6.11−6.30　画廊喫茶ジェイ
熊本市大江本町6-9(妙蓮天神電停前) TEL372-8732

画廊喫茶ジェイで開催された今回の絵画展は、梅雨の湿った時期を前にして、スペインの乾いた(湿り気のない)空気と明るい日差しが感じられる、とてもすがすがしい作品の数々が並ぶものとなった。作者の川上順一さんは約18年前にスペインへ単身で渡り、以来セビリアで画家活動を続けている。今回は中でもスペイン・アンダルシア地方の風景を美しく描いた素敵な作品ばかりであった。
スペインへ移り住む以前は、今とは全く違った制作スタイルで彫刻作品を主とした前衛的な立体制作をしていたという。しかしそれまで数ある受賞歴を持ちながら、やはり思いつき(アイデア)だけでは限界があるということに気づき、本格的に絵を学んでみたいとセビリア大学へ進んだ。そこで風景画を専門的に学び、特にセビリア、アンダルシア地方の美しい田舎の素朴な光景に魅了されたという。どの作品も、何らの解釈も付けず、ただ目に映るものそのものを描くということの楽しさ、そして感動が伝わってくるような筆致であった。照りつける太陽、乾いた大地、群れをなし移動する羊たち、そしてどこまでも続く小麦畑やぶどう園などスペインならではの牧歌的モチーフがせわしい日常の時の流れを止めてしまうかのようである。常に人々が集いほっとしたひと時を過ごす空間である「ジェイ」ならではのすばらしい絵画展だった。(S.S)

Art de Gyan!
[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どうぞ」の意です。

「第２０回記念『書法篆刻展』」
2005.6.21−26　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

雄熊篆会(平方研水代表)の会員63人が145点の書作品を展示した。
作品は古代文字である甲骨文字や金文、木簡、小篆、印篆に隷書等をつかい個展の篆書から創作まで、造形的にも面白く活気に満ちて多彩である。
平方研水さんは、「車鰲迎え」の篆書の一部を篆刻と篆書をうまく調和させ、刀の冴えを見せる。宇治寿康さんは「虛空有響、打水無聲」の禅語の対句を素朴に力強く刻している。金冬心の篆書も大作に仕上げていた。米村静山さんは昨年1年間に出品した日本篆刻展、読売書法展等の石章七方を側款まで示し努力のあとが感じられた。迫水苑さんは「鳥道絶東西」を小篆で力強く大書していた。水田雲涯さんは西周時代の秦公簋銘文を大作に仕上げている。
平方さんの師である梅舒適(日展参与)さんの長陪「斉讃歌」は、造形的にも工夫され、自然体であり雄渾な運筆はさすがである。更に文字にマッチされた雰囲気も見事で会場で光っていた。(S.K)

「伝統工芸館友の会涼の工芸展」

「伝統工芸館友の会涼の工芸展」
2005.7.5 −7.10　熊本県伝統工芸館
熊本県千葉城町3-35　TEL324-4930

伝統工芸館の友の会は、事務局長の城淳子さんの主導のもと、日本各地の伝統工芸の産地を訪れる研修旅行を実施しているという。この長年のつながりをもとに、自分たちで選んだ作家を紹介する工芸展を年間2回、夏と冬に開催している。来場者の案内も友の会が行っており、作家や作品が生み出される環境を説明するなど、和やかな会場で、作品の手のぬくもりが伝わってくる工芸展であった。(Y.H)

「第35回同光会書展」
2005.7.20−7.24　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

福岡教育大学書道科を卒業した熊本県出身者の書道展である。今回はＯＢ19名に現役学生6名を加えて計25人が、それぞれ大きさ、形式、内容ともに自由発表ということで、社中展とは違った趣である。
行草書作品や仮名作品は勿論、金文、石鼓文(古代文字)などの篆書から、現代様式である漢字仮名まじりの調和体まで、ある程度幅のある変化が見られた。
大学改組によって今は性格が変わっているが、元々福岡教育大学書道科は特殊という伝統を持つのでレベル維持が大変とおもわれるが、連合体をまとめて35年間活動を続ける努力には敬意を払いたいと思った。(T.M)

「第68回　銀光展」展示風景

「第68回　銀光展」
2005.7.12−7.18　県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本の代表的な公募展。計227点の作品が展示されていた。油彩の作品がほとんどで、風景、人物、静物などが具象で描かれていた。
銀光会賞の松井のり子さんの作品「夏A」は、中心に3人の人物が背中を合わせ座っている構図で、明るい背景の中に色黒く描かれた人物が物体あるいは建物のように不思議なシルエットとして浮かび上がっているようにも見えた。タイトル通り、ムワッとする雰囲気を感じる作品。
出品者は若い学生から熊本で活動する画家の方まで幅広く、長く続く銀光展は美術を愛する人々の発表の場として、熊本における美術活動に貢献している。(A.T)

●発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.22　2005年8月発行(夏号)　○無料○　●編集人／南嶌 宏　担当／冨澤 治子　●印刷／コロニー印刷　●デザイン／松永 社デザイン事務所　●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845 熊本市上通2-3　TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7892